

七ヶ浜に関わり続ける これからも



避難所の空気はよどんでいた。3枚並べた座布団でお年寄りが横になり、若い世代は段ボールを一枚敷いて毛布にくるまっていた。

2011年3月25日。NPO法人レスキューズトラックヤード(RSY、名古屋市)の浦野愛さん(45)は、宮城県七ヶ浜町に入った。

発災時、NPOの海外研修で米国にいた。研修は5カ月余り残っていたが、「帰らないと何のために活動してきたかわからない」と切り上げ、帰国した。

七ヶ浜は、仙台市の東にある海沿いの町だ。震災当時の人口は約2万人。町内で109人が亡くなり、2人が行方不明になった。1995年の阪神大震災や04年の中越地震などでも被災地に入り、「求められる支援がイメージできる」という自信があった浦野さんも、津波の被災地は初めてだった。

現地に入った翌日、避難所の足湯づくりに取りかかった。



宮城県七ヶ浜町で災害支援ボランティアに炊き出しを渡す浦野さん(左) 2011年3月25日、いずれもレスキューズトラックヤード提供

名古屋のNPO法人「RSY」 「生きる力 一緒に見つける」

「避難所は寒いし、体だけでなく心までかたくなって内向きになってしまふ。足湯って数分の交流だけ、体が温まれば、気持ちも不思議と開けてくる」。阪神大震災で学んだことだ。

避難所でボランティアをしていた学生たちも被災者だった。家から持ってくるおにぎりは物資不足で日に日に小さくなっていった。名古屋から持ち込んだ食材で炊き出しを始めた。

5月上旬からは仮設住宅への入居が始まった。ある日、玄関にビールの缶が並んだ仮設住宅を見かけた。洗濯物も出ていない。一人で暮らす男性は、自力では立ち上がれないほどやつれていた。海沿いに住んでいたが、内陸部の仮設に移ってきたという。「海が見たい」。浦野さんたちは車に乗せ、海の近くをめぐる。そんなドライブをきっかけに外出するようにになり、食欲も戻ったという。

浦野さんは2年ほど、七ヶ浜町で暮らし続けた。町民として被災者の日々を見つめるうち、気づいたことがある。被災者は「3層」にわかれてきていた。

「自力で再建を進められている人が約4割。体が不安定で明らかに立ち直れていない人が3割くらい。その中間で踏みとどまっている人も3割ほどいて、町にはそこを見つめる余力がないので、すごく危ない」。仮設住宅の巡回に力を入れ、町と協力して運営した「きずな

ハウス」でも思いつく限りの企画を催した。ここでも足湯をつくり、子ども放課後学習の支援(「当地たい焼きの開発」...)。被災者が何に興味を覚えて寄ってくるかわからない。さまざまに仕掛けで、多くの人たちの「交差点」をめざした。

まもなく震災から11年が過ぎる。いまも2〜3カ月に1回のペースで町を訪れる。それでも、浦野さんには「もっとできた」という物足りなさもある。

災害公営住宅の入居者の高齢化率は50%を超えた。家を再建したことで借金を背負い、返済に追われる人もいる。「時がたつほど、一人ひとりをちゃんと見ていくことを繰り返すしかないんだと思う」と話す。

大切なことは、関わり続けること。これからは若い人を連れて行く。「最初は支援ボランティアと被災者という形に関わっていたが、いつしかお互い大事な存在になった。支援者だからといって支えるだけじゃない。私も町に支えられている」

利用者からスタッフに 一緒に成長した

「きずなハウス」は裁縫や木工の工房として始まり、21年3月まで続いた。かつて利用者で、スタッフも務めた渡辺陽太さん(19)は「本当にあったかい場所だった」と振り返る。

震災は、小学2年生のときだった。家族に犠牲者はなかったが、「衝撃で言葉がなかった。正直ここまで大きい津波が来るとは思わなかった」と言う。

体験を伝えよう。地元中学校に進むと、紙芝居を使った語り部の活動を仲間と始めた。紙芝居は「みゆうとゆうみ」。



仲間と一緒に震災体験を伝える紙芝居を上演している渡辺陽太さん(右)

岩手に住むきずなが、津波の影響で自分たちの中学校に転校してくる。実話に基づき、日常の尊さを訴えたかった。

主な活動の舞台が、きずなハウスだった。希望してアルバイトのスタッフになった。大切な人を失った人たちに、「わかります」「大変でしたね」などと伝えるのはよくないと思つたという。「マイナスのことを伝えるより、一緒に頑張っていきたい」と伝えてきました。

相手が「きずなハウス」の思いをくみ取りながら活動することで、僕も成長できた。今は、宮城県石巻市にある大学で学ぶ1年生。新型コロナウ

記憶を訪ねて

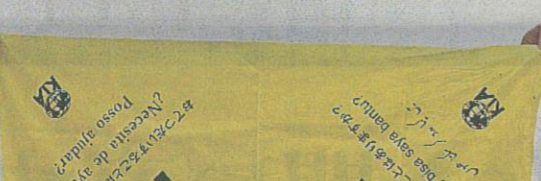
避難者ら15万人 名古屋駅に



死者・行方不明者が約10万人にものぼったとされる10023(大正12)年9月1日の関東大震災。東京から遠く離れた名古屋にも、その犠牲者を悼む供養塔が残されている。

災害避難所で外国人支援 ボランティア用に 小牧市がバンダナ

外国人が多く暮らす愛知県小牧市が、災害時に外国人を支援するボランティア用に、オリジナルのバンダナを作った。避難所に身を寄せた外国人が、支援ボランティアを一目で見分けられるようにする狙いだ。



+C 防災

